

共読による基礎ゼミ改善

— 2018年度の取り組みを踏まえて —

孫 犁 冰

The improvement of basic seminar with joint reading

— Based on the teaching approach in 2018 —

Sun Libing

1. はじめに

1.1. 問題意識の所在

全国大学生生活協同組合連合会は、日本全国の国公立および私立大学の学部学生を対象に、学生生活実態調査を行っている。その『第53回学生生活実態調査報告』（実施期間：2017年10～11月）によると、自宅生の場合、1人当たり月平均支出する「書籍費」は1,340円（前年-110円）、2年連続減少し、1970年以降、金額、支出に占める構成比（2.1%）ともに最低となった。他方、下宿生の場合、「書籍費」は1,510円（前年-80円）、金額、支出に占める構成比（1.3%）ともに自宅生同様1970年以降最も低くなった。また、授業時間を除く予習・復習・論文などの勉強時間は1日平均49.6分。1日の読書時間は平均23.6分（前年-0.8分）と3年連続減少となった。また1日の読書時間が「0」分の割合は53.1%と、前年から4.0ポイント増加し、5年間で18.6ポイント増となった。このような調査結果に対して、「読書に対し、スマホの直接的な効果が弱いことは確認できた。」「むしろ、最近の大学生の高校までの読書習慣が全体的に下がっていることの影響が大きい。」と浜島幸司が指摘している。

1.2. 能動的学修によって学生の主体性を引き出す

一方、2020年の日本教育改革で実施される学習指導要領では、学校教育法第30条第2項に示される、以下の3点が育成すべき資質・能力である、とされている。1) 個別の知識・技能（何を知っているか、何ができるか）、2) 思考力・判断力・表現力（知っていること・できることをどう使うか）、3) 学びに向かう力・人間性（どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか）。これら三つの柱の要素は、知識として教えられるだけで身に付くものではなく、問題発見・解決を主体的・協働的に行うことによって初めて定着するものだといわれている。

1.3. 多読・共読を促す基礎ゼミ指導の課題

以上を踏まえて、筆者は短大教育において、特に学生の「共読」「寛容さ」「生涯学習」という3つの

キーワードを心がけながら、学生に「活字を読む習慣」を身に付けさせようとしている。基礎ゼミにおける「共読」とは、学生同士のみならず、学生と教員、学生と本の著者による共通理解・相互理解を高める学修過程である。今日の社会は、周りの人間や人工知能（AI）との共生を求められる。また、分業がより一層進むなか、いろんな人と関わりながら、知識やアイデアを交換し合い、共感をしていくコミュニケーション能力を身につけるために、学生のうちに、体験学習を重ね、EQ（感情指数）とIQ（知能指数）を同時に向上させる努力が必要である。相手の感情を察知すること、自分の感情を適切に表現すること、いずれも「寛容さ」を意識的に育むことになる。「寛容さ」とは、自分と異なる意見や考えをもつ他人に対して、一定の理解を示すことである。心を広くもつことによって、より多く吸収できるようになり、視野も広げることができる。また、学ぶという行為は、短大を卒業するとともに止めてしまうのではなく、むしろ社会人になってから、本格的にスタートすることである。「生涯学習」の準備段階としても、読書という好みを在学期間中に育ておく必要がある。

2. 研究の目的

短大一年次の基礎ゼミは、学生に読書に親しんでもらい、読書による語彙力・表現力・思考力・対話力を向上させるとともに、視野の広い人生観や豊かな人間性を養成する絶好の時期である。筆者は今まで各年度において実践してきた内容をより充実させるため、「多読力を高める基礎ゼミ改革案」を提出し、後、「2018年度新潟青陵大学短期大学部学長教育改革助成金」を受けることになった。以下は実施状況について、ご報告を申し上げる。

3. 研究の方法

3.1. 対象

本研究の対象は本学人間総合学科の一年生14名（全員女子）である。対象とする授業は筆者が担当する2018年度の基礎ゼミ（通年2単位）である。但し、上記した助成金の採択コメントには「基礎ゼミではなく、正課外において実施し、成果発表・報告を具体的に行うこと」と書かれている。そのため、2018年6月21日に、学生に当指導計画の趣旨および条件について説明を行った。学生は、読書によって自分をもっと高めることができるという認識の下、「正課外」という条件について理解を示してくれた。それ以降、通常の基礎ゼミでは教務が決めてくれた日程と内容を熟し、そのほか、「正課外」の時間を設けて、当指導計画を実施していた。

3.2. 実施期間

実施期間は2018年7月～2018年2月である。この期間に、「正課外」の時間に10回の授業を行った。

3.3. 指導計画

本研究における授業の全体指導計画は以下の通りである（表1参照）。10回の授業の指導内容は、導入編、予読編、本読編、復読編、続読編、永読編と、大きく6つの項目に分かれる。指導方法について、4つのステップを踏まえている。

表1 多読力を高める指導計画

回	授業内容	指導方法	能動的学修
第1回目	導入編—対角線を引くって何？	〈Step 1.〉能動的学修によって松岡正剛著『多読術』を解体し、「読む」という行為の意味について、深く掘り下げていく。	アイスブレーキング
第2回目	予読編①目次を遊ぼう		問答式
第3回目	予読編②後書きを味わおう		音読・輪読
第4回目	本読編①文字遊びをしよう		ブレインストーミング
第5回目	本読編②好みの揺れ幅とは？		ワールドカフェ
第6回目	復読編①注意のカーソルが指し示すもの	〈Step 2.〉各自の好きな本を1冊買い、著者の「意表」と「意図」および自分の理解をみんなと分かち合う。	発見・体験
第7回目	復読編②キープブックを見つけた！		プレゼンテーション
第8回目	続読編①私の個性はこれだ！	〈Step 3.〉各自の好きな本をもう1冊買い、その本の良さをアピールした上、ほかのメンバーにプレゼントする。	プレゼンテーション
第9回目	続読編②多読・広読・攻読の醍醐味		発見・体験
第10回目	永読編—多読な私という可能性	〈Step 4.〉もらった本を読んだ感想をみんなと分かち合い、共読ゼミを確実に仕上げ。最後に、30冊に帯をつけて図書館に展示する。	プレゼンテーション

4. 実施の概要

4.1. 〈Step 1.〉 能動的学修によって松岡正剛著『多読術』を解体し、「読む」という行為の意味について、深く掘り下げていく。

【第1回目 導入編—対角線を引くって何？】

「知の巨人」と呼ばれる松岡正剛（以下「セイゴオ先生」）は、多くの著書を出版し、情報文化と情報技術をつなぐ研究開発に多数携わる。筆者は、エッセイや写真などの資料を用いて、セイゴオ先生との出会い、日本と東アジアの未来を考える（NARASIA）委員会で学んだ三年間、イシス編集学校で奮闘した三年間などを学生に紹介した。「出会い」は「気づき」から始まり、そして「対角線を引く」ことによって、それ以降の人生をより豊かにできるという可能性を学生に示した。

【第2回目 予読編①目次を遊ぼう】

まず、学生は、アンケートの質問に以下のように回答した。

回答①については、前掲した『第53回学生生活実態調査報告』とはほぼ一致している。したがって、学生は「読書習慣」を身に付けるためのトレーニングを受ける必要があると断言できる（表2参照）。

表2 質問①の回答

質問①：月に本を何冊読むか？
回答①：0冊（7名）。0～2冊（4名）。2～3冊（3名）。

回答②を見ると、感受性の高い年齢層であるため、学生は論理的思考よりも、共感や娯楽性を求める傾向が高い（表3参照）。

表3 質問②の回答

質問②：好きな本のジャンルは？
回答②：小説（サスペンス、ホラー、ファンタジー）、漫画、エッセイ、エンターテインメント、ノンフィクション

回答③で分かるように、人気小説家の作品はよく読まれている。今時の女子大学生の好みを大よそ反映している。カフカと回答した学生がカバンから文庫本の『変身』を取り出した時、全員を驚かせた（表4参照）。

表4 質問③の回答

質問③：好きな著者は？
回答③：湊かなえ、山田悠介、島本理生、カフカ、みやめこ、メイ、高瀬ゆのか、宗田理、鎌田洋、野々村友紀子

回答④例を見ると、学生の関心事は主に小説であることが浮かび上がる（表5参照）。

表5 質問④の回答

質問④：好きな作品名は？
回答④例：『伝える力2』、『ディズニーおもてなしの神様が教えてくれたこと』、『ぼくらの七日間戦争シリーズ』、『16歳の教科書』、『サマーウォーズ』、『ベルナのしっぽ』、『僕等がいた』、『赤い糸』、『告白』、『万引き家族』、『日々是好日』、『贖罪』、『銀河鉄道の夜』など。

回答⑤例によれば、学生は読書の良さをよく理解している。読書の意欲を引き出すためには、読書の面白さを実感してもらうために、指導を行う必要性を再確認できた（表6参照）。

表6 質問⑤の回答

質問⑤：読書の理由は？
回答⑤例：・言葉の表現力をつけるため。
・本の中の世界に引き込まれて嫌なことを忘れられる。
・難しい言葉、漢字が身に付く。
・インスピレーションを与えてくれる。
・語彙力を増やす、知識を増やす、話題が増える。
・おもしろいから、共感するから。
・多様性を育んでいくため。携帯を使う時間を減らすため。
・読みたい本があるから。
・温かい気持ちになりたいから。

毎年、『多読術』は本学の入学前教育読書リストに入っている。しかし、読む学生は1名程度。実は、セイゴオ先生のことを学生は知らない。その上、本のタイトルには、「読」に「多」が書かれているため、もともと読書習慣のない学生にとっては、これはできるだけ避けたい一冊となる。

「歴史、哲学、思想、宗教、社会、経済、芸術、文学、言語、心理・・・どうして一人の人間がこれほど他分野の巨人たちに肩を並べられるのか？異常ほど旺盛な知的好奇心。倦まず弛まず励む勇氣。国を憂え民を愛する良心・・・ふっと、「遊心」という二文字が思い浮かんだ。編集工学を解説するには「あそびごころ」と訓読したほうがよいが、「ゆうしん」と音読すると、「思いを深く遠く馳せる」になる。そうだ、私が松丸本舗から頂いたギフトは「翼」なのだ。その翼を広げれば、どこまでも深く、どこまでも遠くへ飛んでいけるのだ」と筆者は推薦文に書いている。

基礎ゼミの学生は『多読術』を配られた。難しそうな本を手にとってみて、誰も表紙をめぐってみようとしなかった。それでは、本を開かずに、一緒に想像してみよう。「あなたが『多読術』を書くなら、●●に何を入れるか。」学生はクイズ感覚で、正解を求めず、自分の回答を少しずつ言い出すようになった(図1参照)。

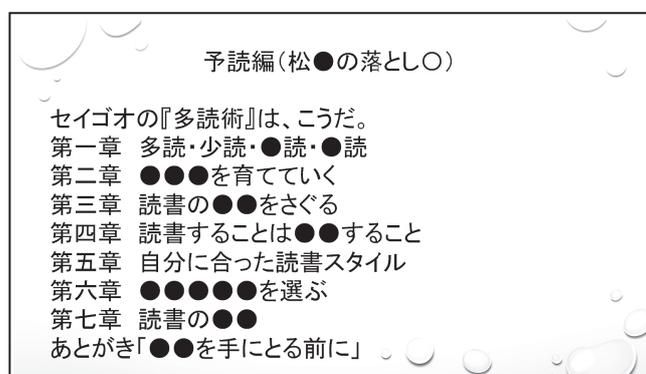


図1 授業中の板書例

【第3回目 予読編②後書きを味わおう】

学生は『多読術』の「後書き」を音読し、気になるキーワードにマーカーで色を塗り、「マーキング読書法」を体験する。1人の学生は一つの段落をじっくり読み上げて、ほかの学生は耳を澄ませながら、目で文字を追っていく。意外と読める。意外と分かる。というように「共読」を体験する。

【第4回目 本読編①文字遊びをしよう】

質問⑥の意図は、学生が「宝探し」のようなゲーム感覚で文字にもっと親むことである。見たことのない言葉を見つけると、ワクワクして書き留めておく。文章を最初から最後まで読むのではなく、単語や熟語を探し出すような文字遊びができる。遊びである以上、苦にならずに、楽しくなる(表7参照)。

質問⑦の趣旨は、「言葉のおもしろさ」に気づいてもらい、「読書は遊び感覚でいいんだ」「全体ではなく部分でも楽しめるんだ」と実感させることである。学生の感想には、「ありそうな表現なのに今まで存在しなかった表現ばかり」、「本を読むことを食べるという考えはなかった」などがある。または、「お酒を沢山飲む人のことを酒豪というように、本を沢山読む人のことを本豪という。何冊まで読んだら本豪と言えるのか。」という質問も出た(表8参照)。

表7 質問⑥の回答

質問⑥：セイゴオの造語を挙げなさい（20語）。

回答⑥例：感読、耽読、惜読、愛読、敢読、汨読、録読、味読、雑読、広読、狭読、乱読、筋読、逆読、再読、重読、吟読、攻読、守読、系読、引読、精読、粗読、閑読、蚕読、散読、少読、多読、多読家、多読術、本豪、疑問エンジン、昆虫採取型、読書に溺れる、全集読書、食読、食読感覚、食読バラエティー、本は着るもの、多重感覚読書、活字中毒、目次読書、知のマップ、感読レセプター、読書レセプター、文体化された聖書、読むマンドラ、マーキング読書法、文章の演技、文章著者という姿、文章の男前、書くモデル、読むモデル、ズレと合致のゲーム、無知から未知へ、意味の市場、意味の交換、意味の作用、理解のコミュニティ、読書エクササイズ、読書筋肉、読書世界、読書立国、編集的、読書は自己編集、編集的相互作用、記号の郵便物、略図の原型、散策選び、書物の海、テキストの森、ジグザグ運動、有価性、イメージの辞書、人生の手紙、ルールの群れ、知の配当図

表8 質問⑦の回答

質問⑦：セイゴオの面白い表現を挙げなさい。

回答⑦例：・本は「薬」にもなるが、「毒」にもなるし、毒にも薬にもならないことも少なくない。

- ・読書というのは、そもそもマゾヒズムなんです。
- ・カラダについてのスキルは安易に捨ててはいけません。
- ・読書シンポジウム。
- ・本はウイルスでもあるし、劇薬でもある。
- ・「負の想像力」という見方や「フラジャイルな観察力」。
- ・注意のカーソル。
- ・本の大食い。
- ・世の中の痛快な交差点。
- ・身勝手な言語人間。
- ・見出しにサビ。
- ・未知のバンドラの箱を開く。
- ・本をノートとみなす。
- ・読書することは編集すること。
- ・読む前に何かが始まっている。
- ・本はリスクとリスペクトの2R。
- ・ワインを読むように読む。
- ・光を放っている一冊。
- ・世の中の痛快な交差点。
- ・温泉であたたまるように読む。
- ・この著者は焼き加減がうまい。
- ・読書はナイーブな行為である。
- ・読書は交際である。

【第5回目 本読編②好みの揺れ幅とは？】

質問8は、学生に「わたしでもできそう」と思わせて、「真似してみよう」という意欲を高めることを狙っている（表9参照）。「本の読み方を真似したい！」「本の内容の捉え方を真似したい！」という回答をしながら、学生は早く自分好みの本を使って、実践してみようという気持ちになり、「読欲」が沸いてきた。

表9 質問⑨の回答

質問⑧：ここを真似したい！

回答⑨例：・本の読み方を目次から読む、後書きから読むなど、工夫して読みたい。

- ・マーキング読書法。読書を二度する。
- ・本の読み方を真似したい！
- ・本の内容の捉え方を真似したい！
- ・寝転がって読む。本に書き込む。ヘッドラインをみる。
- ・本に線やアンダーラインを書き入れる。
- ・目次読書や帯。
- ・難しい考えなので、こんな発見をしてみたい。
- ・読みながらマーキング！
- ・「わかったつもり」で読まない。無知（知らないこと）→未知（分からないこと）。未知への探求はおもしろい。
- ・自分で言葉を作ること。表現力が豊かなところ。
- ・語彙力、想像力、文章をまとめる力。
- ・明治の小説を読むときは、ゼットイに渋茶と塩煎餅を用意する。最近ではサラダおかきでもいいことにしました。
- ・科学書を読むときは、できるだけ大きな机を選ぶ。シャープペンシルでアンダーラインを引き、欄外にメモを入れる。ゼットイに2Bのシャープペンシル。タテ組はゼットイ青ボールペン。

【第6回目 復読編①注意のカーソルが指し示すもの】

多読家であるセイゴオ先生のお言葉に勇気づけられて、学生は書店に足を運び、各自の好みの一冊を探し始めた。それと同時に、仲間にプレゼントする一冊も決めなければならない。ここで、学生にプレゼンテーション用パワーポイントの雛形を配布した。『多読術』を参考しながら、雛形の7つの質問に回答する。本の情報を読み取り、著者の意図に共感し、自分の感想をまとめて、ポイントを空欄に記入しておけば、プレゼン資料ができあがる。まさに雛形を守るという作業を実践した。

【第7回目 復読編②キーブックを見つけた！】

セイゴオ先生曰く、「本は分からないから読む」。そして、読書は「無知から未知へ」の旅である。「鍵穴が書物で、鍵を入れるのは読者である。」学生は『多読術』の第六章「キーブック」を音読し、いわゆる「自己反映」の読書について、考える。「本は人生の鏡だ」というが、セイゴオ先生は「本は水たまりみたいだ」という。それはなぜか。学生は鍵穴である書物に、鍵を入れようとする。

<Step 3.>各自の好きな本をもう1冊買い、その本の良さをアピールした上、ほかのメンバーにプレゼントする。

【第8回目 続読編①私の個性はこれだ！】

本を選び基準はさまざまでよい。せっかく指定された「必読書」から解放されたため、この機会で自分の「好み」を思い出してみよう。さまざまな「好み」が自分の「個性」を作り出してくれている。学生は「自分のために選んだ」個性的な一冊を手にして、なぜ、どうやって、どんな思いで、この一冊と出会ったかを語る(表10参照)。「自分はこうやってこの一冊と対角線を引いてる」と学生は気づき、プレゼンテーションをしながら、本に対する愛着を感じる。

表10 自分のために選んだ一冊

学生	著者	題名	選んだ理由
1	白取春彦	頭がよくなる思考術	表紙が赤色でめについたから。
2	松原英多	人の名前が出てこなくなったときに	兄が大学で認知症について学んでいてよく話を聞くから。おばあちゃんの家近所の人認知症になった。
3	菅野仁	人と人のつながりを考える友だち幻想	本屋のランキングで上位にあつてきになったから、友達関係に悩むことがあるから。
4	0号室	勇気は一瞬、後悔は一生	本についてる帯を見て、読んでみたいと思った。
5	松下幸之助	道をひらく	店頭で並んであり目に留まったから。内容を読んでみたら納得できるところがあったから。
6	ほしばゆみこ	ふたりだからできること	1人でできることもたくさんあると思うが、1人でできないこともある。1人でできないことは、誰かと協力して行うことが当たり前だと思うかもしれない。だが、それを当たり前と思わず、一緒にいてくれる人に感謝することを忘れないようにしたいから。
7	梶裕貴	いつかすべてが君の力になる	人気の声優さんの本だったから。
8	鹿島しのぶ	また会いたいと思われる人	目次を読んで気になったのと、単純にどのようにしたら人に好かれるのか気になったから。
9	石黒由紀子	猫はうれしかったことしか覚えていない	猫が好きだったのと、エッセイであったから。
10	鎌田洋	ディズニー サービスの神様が教えてくれたこと	ディズニーが好きだから。
11	有川真由美	女子が毎日トクをする人間関係のキホン	紀伊國屋をぶらぶらしてから目に留まった。人付き合いが下手だから、気になって立ち読みしてから面白くて買った。
12	あまこようこ	冷凍フルーツのひんやりスイーツ	今この季節にぴったりだと思ったから。簡単に作れるというところに興味をもったから。

学生	著者	題名	選んだ理由
13	岸見一郎・古賀史健	嫌われる勇氣	タイトルのインパクトと、ネットの口コミを見たことで、前からこの本の存在をしており、読んでみたいと思っていた。
14	今泉忠明	ざんねんないきもの事典	生き物の進化や歴史について絵を交えて分かりやすく説明されていて、生き物 122 種の残念な体、生き方、能力が生き物ごとに詳しく載っていて、面白そうだなと思ったからです。

【第9回目 続読編②多読・広読・攻読の醍醐味】

自分のご褒美に本を選ぶこともいいが、仲間のために一冊を選ぶことはもっと楽しい。仲間とは、同じ基礎ゼミのメンバーで、じゃんけんして勝った人から14冊の中から選ぶというルールの下、「わたしの仲間」は一体誰になるのかは分からない。そのなんとなく抽象的な「仲間」の好みを読めないため、想像しながら、その子に喜んでもらえるように書店で悩む。孔子曰く、「己の欲せざるところは人に施すなかれ。」仲間のための選書はより配慮しなければならないが、相手の笑顔を想像する時に味わった幸福感は、まさしく「贈与」という行為の醍醐味である(表11参照)。

表11 仲間にプレゼントする一冊

学生	著者	題名	選んだ理由
1	横山泰行	「のび太」という生き方	無理せず自分らしく生きるというフレーズが、これから自分がどう生きていくかを考えられる本なのかなと思い、気になったから。
2	野々村友紀子	あの頃の自分にガツンと言いたい	バスボムはすぐ使え！にとっても心に惹かれたから。
3	ジェリー・ミンチトン	うまくいっている人の考え方	みんなにうまくいってほしいから。
4	伊藤守	The Angel's Message	背表紙が気になって、開けてみた。
5	櫻井恵里子	心くばりの魔法	ディズニーはみんながよく知ってるから読みやすいと思ったため。
6	菊田まりこ	ありがとうがしりたくて	私たちが普段から使っている「ありがとう」という言葉。何かをしてもらったら何気なく、「ありがとう」と言うと思う。その何気なく使っている「ありがとう」の言葉の本当の意味をこの本が教えてくれるから。
7	西沢泰生	心がほっとする50の物語	ストレス解消にいいと思った。
8	外山滋比古	こうやって、考える	自分も興味があったから、表紙が可愛らしかったから。
9	神岡真司	衝撃の真実100	隙間時間に読める。100個の事柄のウソ・ホントがわかる。
10	鎌田洋	ディズニー サービスの神様が教えてくれたこと	温かい気持ちになってほしいから。

学生	著者	題名	選んだ理由
11	中野日出美	人間関係でガマンしていませんか？	エッセイ、体験を織り込められているから。
12	小田真一	のっけレシピ ベスト190	いつものおらずに飽き飽きしていませんか？そこで、一工夫をするだけでさらにおいしいご飯のレシピを紹介したいと思ったから。
13	今泉忠明	猫がいればそれだけで	猫が好きなので、みんなにも猫の良さを共有できたらと思いこの本を選んだ。また「猫に学べば、人はもっと幸せになる！」という帯のキャッチコピーにも惹かれた。書下ろしのイラストも可愛い。
14	後藤紗耶花	ちぎりパンレシピ	パンは好きだけど、作ったことはなかったから興味があったのと、色々なキャラクターのちぎりパンが可愛かったからです

<Step 4.>もらった本を読んだ感想をみんなと分かち合い、共読ゼミを確実に仕上げる。最後に、30冊に帯をつけて図書館に展示する。

【第10回目 永読編—多読な私という可能性】

仲間からプレゼントしてもらった一冊は、自分の「好み」であれば嬉しいが、仮にそうではなくても、自らの経験を踏まえたうえ、相手の気持ちを丁寧に汲み取り、「引かれた対角線」を手取る。学生は2回目のプレゼンテーションを行う。1回目の発表前にパワーポイントの雛型を与えられたが、2回目のパワーポイントはフリースタイルでいいという指示があった。

また、1回目の発表で、「みんな頑張っている」という緊張感があったため、2回目は、学生はワンランク上の発表を目指した。そして、学生は必ず、「自分が発表している本は何々さんからのプレゼントです。何々さん、面白い本を選んでくれてありがとう」とお礼を言う。学び合い、競い合い、高め合い、助け合う。互いの努力によって、共読ゼミを仕上げることができた。

5. 実施の結果と考察

第10回目の「正課外授業」を実施した後、学生は「わたしの基礎ゼミ 一年間の振り返り」について、レポートを提出した。求められたのは「400字程度」であったにも関わらず、学生は平均800字前後の文章を書いた。そのうち、最多1200字を書いた学生もいた。紙幅の関係で、回答例を2つ挙げることにとどめた。

学生1の場合、最も学んだことは「本を読むことの大切さ」だという。自分でいろんな工夫をしているうちに、読書が好きになり、図書館の利用回数も増えた。今後も就職活動をはじめ、「前向きさを大切に進んでいく」ことが期待できる(表12参照)。

学生2の場合、一年間の最大の収穫は「読書」と「コミュニケーション」だという。大きな声で本を「段落読み」し、みんなと著者の意図や表現を分かち合う。そして、読書しながら、要点を抽出し、みんなの前で堂々とプレゼンテーションをする。経験を重ねるうちに、自信がつくようになるという良いサイ

表12 「わたしの基礎ゼミ 一年間の振り返り」の回答例(その1)

質問⑩：基礎ゼミの座学、読書ワークショップ、読書プレゼンテーション、外部講師の特別講義、先輩の就職アドバイス、課外活動、仲間づくりなど、ご自身の一年間の収穫と進歩を書きなさい。また、二年次への展望や目標について、述べなさい。

回答⑩例：

<学生1>私がこの1年間孫ゼミで学んだことは、「本を読むことの大切さ」です。日本という国にいて勉強できる環境に、お金を払わずに本を好きなだけ読める環境にながらもほとんど本を読まなかったことを今すごく後悔しています。今の時代インターネットが当たり前の日常になりました。若い人が中々「本」というものに手を伸ばさなくなりました。現に私もそうでした。読んでも、学校の宿題が理由で自分から進んで読むことなんてあまりありませんでした。ゼミの読書レポートの時この沢山の本の中から自分が気になる本を見つけるとき探し方をまず工夫してみようと思うようになったのです。今までは大きい文字がちょっと書かれたイラスト多めの本ばかり。大学生になる前は中を見てから買おうなんて思ってもいませんでした。

正直言うと、勉強が苦手なわたしは文字をみるのが好きではなかったもので、本自体には興味がなかったんです。すみません…(笑)

まず、本を読むようになってから、よく学校以外の図書館を利用数が数倍に増えました。今まで行っていなかったわけではなく、図書館にはよく「テスト勉強」をしに通っていました。あれだけの本が並んでいるのにも関わらず、スルーしてそのまま学習室に閉じこんでました。今では休憩時に頭をリフレッシュさせるために一冊ぐらいなんでもいいから持っていけばよかったです。あとこれは体験談なのですが、大学生になって一度友人関係に深く悩み落ち込んだときがありました。わたしの行動、発言が今まで苦しめていたといわれたときはかなりショックを受けました。実はこの件、本の見た目だけで判断して中身を知ろうとしなかった自分が重なりました。自分が何かを変えるためにも、中身をよく見て相手の事のいいところを発見することは、読書を好きになって面白い一冊に巡り会いたいと思わせてくれたそんなゼミですごくできてよかったです。また二年生になったら、やはり就職活動を頑張っていきたいと思います。

これからも前向きさを大切に進んでいきたいと思います。(約840字)

クルができたという(表13参照)。

6. 結 び

筆者に「共読」という言葉を教えてくださったのはセイゴオ先生であった。『松丸本舗主義：奇跡の本屋、3年間の挑戦』の中に、次のような一節がある。

「共読」とは、本を薦め合い、読み合い、評し合う読書形態のことで、一般的なりーディング・スタイルを自己完結型とするなら、「共読」は発展的循環型の読書である。「共読」によって情報は共有され、交換される。情報を交換し合うことで、本と人がもともと持っているインタラクティブな共読感覚を呼び覚ます。

かつて、セイゴオ先生の松丸本舗は、「共読社会」の最小モデルになっていた。筆者は2010年から2012年の間、「セイゴオ式目次読書法」「本の贈りもの術」「三冊屋—日本数寄篇」などの読書ワークショップ

表13 「わたしの基礎ゼミ 一年間の振り返り」の回答例(その2)

質問⑩：同上。

回答⑩例：

<学生2>私は、基礎ゼミでたくさんのことを得ました。この一年を通して学んだことは大きく分けて二つあります。

一つ目は、読書についてです。私は、小学生の時は学校の図書館を利用して本を読んでいたのですが、中学生になってからは、課題で読む以外はまったく読まないようになってしまいました。ですが、大学に入学して、ゼミの時間で本を読む機会ができました。はじめは、しばらく本を読んでいたのが少しく戸惑いがありますが、久しぶりに本を読んだらとてもおもしろく感じる事ができました。ゼミの時間では、読書して終わりではなく、本を読んで学んだことや、自分のお気に入りのところなどをまとめることもしました。なので、本をさらに深く理解できてよかったです。読書に対して勝手に苦手意識を持っていましたが、その気持ちを取り除くことができてよかったです。また、友達に本を紹介してもらうことは今までなかなかなかったので、とても新鮮で、よい機会になりました。

二つ目はコミュニケーションについてです。私は、人とコミュニケーションをとるのが得意ではありませんでした。ですが、ゼミの時間では、最近どんなことがあったのか話したり、段落読みをしたりすることが多くありました。最初は少し大変だなと感じたけど、今では慣れて、楽しく感じられるようになりました。また、プレゼンテーションもよい経験になりました。今までほとんどしたことがなく、苦手意識がとても強かったのですが、やってみると思っていたよりも緊張せずに発表することができました。人の前でプレゼンテーションをすることはこの先社会に出ても増えていくと思うので、ゼミの時間でできてよかったです。

この二つのことを通して、私自身が成長することができました。これからも読書を続けようと思え、周りの人とたくさんコミュニケーションをとろうと思いました。そして、基礎ゼミで一年間学んだことをこれから活かしていきたいです。(806字)

ブを数回体験した。それ以来、基礎ゼミや特別研究の授業で、必ず『共読・多読』をテーマに読書ワークショップを行う。今までは図書館の本を利用していたが、今回は「学長教育改革助成金」を頂くことで、初めて学生が三冊屋になった時の喜びの笑顔を見ることができた。教員として、学生に知識やノウハウを教えながら、学生の学び続ける力を引き出していく所存である。そして、何よりも学生の無限大の可能性に期待したい。

注・参考文献

- 1) 松岡正剛『多読術』筑摩書房, 2009
- 2) 孫犁冰「再見、松丸本舗」, 松岡正剛『松丸本舗主義：奇跡の本屋、3年間の挑戦』青幻舎, 2012, 364-367ページ
- 3) 「松丸本舗ワークショップ」, 松岡正剛『松丸本舗主義：奇跡の本屋、3年間の挑戦』青幻舎, 2012, 308-313ページ
- 4) 「方法の目、共読の耳」, 松岡正剛&イシス編集学校『共読する方法の学校：インタースコア』春秋社, 2015, 395-404ページ
- 5) 全国大学生生活協同組合連合会『第53回学生生活実態調査報告』
<https://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html>, 2019. 1. 5閲覧